

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に歸臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られてきた。このころからその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第したころの豊頬の美少年のおもかげは、いずこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のためについに節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既にはるか高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は怏々として樂しまず、狂悖の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿ったとき、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寢床から起き上がると、何かわけの分からぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻つてこなかった。付近の山野を搜索しても、何の手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史、陳郡の袁倬という者、勅命を奉じて嶺南に使いし、途に商於の地に宿った。次の朝まだ暗いうちに出発しようとしたころ、馭吏が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょうと。袁倬は、しかし、供回りの多勢なのを待み、馭吏の言葉を退けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つたとき、果たして一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁倬に躍りかかると見えたが、たちまち身を翻して、もとの叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった。」と繰り返しつづやくのが聞こえた。その声に袁倬は聞き覚えがあった。驚懼のうちにも、彼はとつさに思いあつて、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁倬は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかった李徴にとつては、最も親しい友であった。温和な袁倬の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかったためであろう。

叢の中からは、A しばらく返事がなかった。 しのび泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。 ややあつて、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。

袁倬は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分はいまや異類の身となっている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まっているからだ。しかし、今、凶らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形を厭わず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

問一 傍線部 A とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。理由

- ア 自分よりもはるかに文才に富む袁倬に対しては、常に劣等感を抱いており、言葉を交わしたくなかったから。
- イ 袁倬が中央官庁から自分を搜索に派遣されたことを察知し、出頭すべきか否か、大きな迷いがあったから。
- ウ かつて親しかった袁倬に対して懐かしくもあるが、今の姿が恥ずかしく、どう対処すべきかわからなかったから。
- エ 監察御史にまで出世した袁倬がねたましくとましく、「我が友」と声を掛けてきたことが不愉快だったから。
- オ 自分よりも劣っていた袁倬が出世をしたことで自信をつけて、自分をなぐさめてきたことが腹立たしかったから。

問二 本文から読み取れる、李徴の人物像を表したものとして最も適当なものを、次から選べ。全体把握

- ア 人との交際は苦手だが、親しくない人にも温情を持って接する寛大な人物。
- イ 眼光鋭く役人による不正を決して見逃さない、正義感にあふれた人物。
- ウ 劣等感を持ちながらも、それを克服しようとして努力をする向上心が強い人物。
- エ 広い知識を持ち優秀ではあるが、頑固で自負心が強く協調性に欠ける人物。
- オ 容姿端麗で周りからの評判もよいが、詩を作る才能には恵まれていない人物。

問一 ウ
問二 エ